



小学校5年の女兒が描いた「現実の朝食」は、会話が乏しい「人マーク」が目立つ。室田洋子聖徳大教授の解説

理想の朝食は友達と食心理学)によつて、絵に全農などで作る「朝ごはん実行委員会」(東京都港区)が小学生五十人に理想と現実の朝食風景を描いてもらったところ、友達と一緒に理想と表現した絵が半数以上を占めた。一方、理想を「家族」と描いたのは三割にとまり、六割近かった四年前の前回調査から様変わりした。

調査は、首都圏に住む小学校五、六年の男女を対象に今年二月に実施。現実と理想の朝食を鉛筆とクレヨンで描いてもらった。それによると、理想の朝食は、「友達」の二十八人、「家族」が十四人で、「自分一人だけ」は五人。前回は、友達が一人、家族は二十九人、自分一人は六人だった。

絵を分析した室田洋子聖徳大教授(発達・臨床

理想の朝食は友達と

小学生が理想の食卓を絵で表現

には、顔や体を線で描いた「人マーク」、手のない人などが目立ち、電車内で食べ物をかじっている絵もあった。室田教授は「人マークは、『食卓に家族はいても、会話が乏しい、何をしゃべっていいか思い出せない』という印。手なし人間は、『食事に参加する気になれない、楽しくない、強制的に食べさせられている』という気持ちの表現」と分析した。

さらに、同実行委は描いた子供とその母親への調査も実施。それによると、朝食を食べなかったときの理由(複数回答)は、母子とも「時間が無い」が八割を超えた。このほか、「眠いから」「食欲がない」という子供も多かった。

こうした調査結果から、室田教授は「生活スタイルの夜型化、塾通いなどで大人も子供も就寝時間が遅くなり、朝食を抜く家族は増えている。十年ほど前から問題視されてきた「孤食」は、今や大半の子供には当たり前。これが進むと、家族ははらばらになり、本来家庭で培われるべきコミュニケーション能力が不足し、学校や社会で人とかわることができない子供が増えるのでは」と警鐘を鳴らしている。